


在外研究員研究報告書

2022年 2月 28日 受付

所 属	グローバル・コミュニケーション 学部	氏 名	伊勢 晃 	
職 名	教授			
研究課題名	フランスベル・エポック期の文学・芸術思潮に関する実証的研究			
研究期間	2020年 9月 2日 ~ 2021年 8月 28日			
滞在期間 ・滞在地 研究調査先	滞在期間	滞 在 地	研究・調査先	
	2020年 9月 2日 ~ 2021年 8月 28日	フランス・パリ	パリ新ソルボンヌ第3大学	
研 究 費	306.6万円	研究成果の概要	別記 4,000字程度	
発 表	題 目 名	発表学術誌名Vol. No.	発行年月日	
	準備中			
	著 書 名	発 行 所 名	発行年月日	
	演 題	講演学会名	講演年月日	

在外研究報告書

グローバル・コミュニケーション学部
教授 伊勢 晃

研究課題名：フランスベル・エポック期の文学・芸術思潮に関する実証的研究

研究期間：2020年9月2日～2021年8月28日

概要

私は2020年9月から約1年間、パリ新ソルボンヌ第3大学 (Université de la Sorbonne-Nouvelle-Paris III) に客員研究員として在籍し、フランスベル・エポック期の文学・芸術思潮に関する研究に従事した。同大学の研究グループTHALIM (Théorie et histoire des arts et des littératures de la modernité) に所属し、同大学名誉教授ダニエル・デルブレユ先生にご指導いただくとともに、フランス国立図書館や附属オペラ座図書館、フランス国立映画センターなどで資料調査を行った。長期に亘るコロナ禍の影響により、移動の制限や学会、セミナー、展覧会の延期や中止などもあり、当初予定していた研究計画を一部変更せざるを得ない部分もあったが、現地研究者、研究機関の協力のおかげで、今後の研究につながる新たな着想を得ることも多く、有意義な研究期間を過ごすことができた。

研究目的は、これまでに行ってきたフランスベル・エポック期の文学・美術思潮に関する研究を同時代の映画、バレエにまで対象を拡大し「エスプリ・ヌーヴォー」の諸相について実証的に解明することであった。20世紀初頭から第一次世界大戦終結までの期間はフランスだけではなくヨーロッパの文学・芸術史上における激動の時代である。文学史上は象徴主義からシュルレアリスムに移行する時期であり、美術史上においても後期印象派からキュビズム、未来派、ダダイスムへとつながる大きな変動期にあたる。19世紀末にリュミエール兄弟によって映画が誕生するが、この新しいメディアも映画史の様々な時期を経験する。技術の進歩とともに、映画は長く複雑な物語を語る事が可能になり、演出と編集によって新しい芸術としての地位を獲得し、例えばアンドレ・バザンの映画理論やレオポール・シュルヴァージュの《Rythme coloré》のような、特に「同時性」や「イマージュ」といった観点からの、抽象的理論化が行われ、他の芸術と寄り添いながらも独自の発展を遂げることになった。数々の「主義」が生まれ、新しい芸術が抽象的に理論化されるなかで、諸芸術は融合の度合いを深め、これまでにない芸術思潮が構築されていく。このような激動期にロシアの興行師セルゲイ・ディアギレフ率いるバレエ・リュスがパリに上陸し、舞踏芸術が他芸術と交流を持ち、世界中にその影響を広げる。バレエが前衛芸術運動と結びつくことで革新的な展開をみせ、モダン・バレエが形成されていくことを考えると舞踏芸術にとってもこの時期は特別な時期であるといえよう。しかし、大戦の前後で新たに生成する原理や運動については、本格的に研究されていない状態が続いている。本研究期間ではこれまでの研究の空白を補うために、諸芸術の動向がもっとも明確に現出している雑誌や新聞における20世紀初頭の映画とバレエに関する諸言説の資料調査を行うとともに、関連書籍の入手や様々な専門家へのインタビューなど、現地でしか実施することのできない基礎的資料の整備に注力した。ここで収集した資料を整理し、文壇や画壇、映画産業、バレエを横断するデータベースの作成を現在行っているところである。特に映画とバレエについては両者を関係づける事実(リュミエール兄弟が最初期の映画でバレエを撮影していることに始まり、フェルナン・レジェが実験的映画《Ballets mécaniques》を製作し、またルネ・クレールがエリック・サティのバレエ《Relâche》の幕間に上映するために映画《Entr'Acte》を撮影したことなど)は枚挙に暇が無いにも関わらず、バレエの変容、発展と新しい芸術として認知される揺籃期にあった映画の関連については、関係性の指摘レベルに留まり基礎的資料に基づいた分析や理論的考察が行われていない。研究期間中、フランス以外の国の作品も

含め、バレエと関連する当時の前衛映画を多数視聴する機会に恵まれ、映像資料も収集した。また、フランス国立図書館が期間限定でアクセスを許可した特別なデジタル資料も入手することができた。構築したデータベースや本資料に基づき、バレエと映画の変化の過程を比較・対照することにより、両者の影響関係について学術的検証を行い、論文として公表する。

フランスはコロナ対応として、10月半ばから夜間外出禁止やロックダウンが行われ、生活必需品を扱う店以外は閉店、文化施設の閉鎖、イベントの中止、特別な理由のない外出の禁止など、非常に厳しい措置がとられた。しかし、このような先の見えない中であっても、人と人はつながりを深め、様々な工夫をこらしながら連帯してこのような状況に立ち向かい、日常の生活を楽しもうとする強い意志が感じられた。このような環境のおかげで、私自身、関係者の協力により、予想していなかったような研究調査を行うことができた。1月25日には、開催が見送られていたフランス国立図書館における展覧会<L'invention du surréalisme>に10名だけ特別に招待され、主催者の一人であるジャック・ドゥセ図書館館長イザベル・デュエ氏の詳細な解説を聞きながら、貴重な資料を閲覧するという経験をした。私の専門とする詩人ギヨーム・アポリネールから始まる本展覧会は文学からシュルレアリスムを俯瞰するという企画で展示の構成や方法も斬新なものであり、カタログも充実した内容であった（パリ・ナンテール大学教授ロランス・カンパ氏のセミナーでもZoomではあったが、同展覧会に関するデュエ氏の講演を拝聴したうえで議論することができ、新しい示唆を得た）。一般には出入りできない図書館の舞台裏を観ることが出来たことも収穫である。また7月27日から8月2日までノルマンディー地方のカブールに滞在し、夏の文化的催し<Rencontre d'été en Normandie>に参加した。新しく開館したブルースト記念館La Villa du Temps retrouvéでは、アポリネールをはじめ20世紀の芸術の新しい方向を示した多くの詩人、芸術家たちの強い関心を惹いた連作小説*Fantômas*の特別展が開催中で、小説全巻と映画やポスター、写真、絵画、フィギュアなどが、当時のものから最近のものまで初見の資料も含め多数展示されていた。これに関連して、ギュスターブ・エッフェル大学准教授キャロル・オルエ氏とパリ第3大学教授ローラン・ヴェレ氏の同映画に関する講演会<Sur les pas de Fantômas...>が開催され、非常に珍しい資料を用いながら、作品成立の背景や受容などについて語られた。アポリネールと本作品の関係については以前、論文を執筆したことがあるが、本研究課題においても、最新の知見を踏まえた上で、さらに広い角度から*Fantômas*を位置づける必要があることを確信した。バレエ・リュスについてはパリ第3大学教授クリスチャン・フェゲルソン氏にジャーナリストで研究者であるセルジュ・ドゥデュリーヌ氏を紹介していただき、バレエ・リュスに関して幅広くインタビューを行った。また氏はポスターやロシア語文献などの資料をご提供くださり、貴重な資料を加えることが出来た。なお、フェゲルソン氏には、バレエ・リュスに関する研究資料や所蔵研究機関、研究者について詳細なアドバイスをいただくとともに、当時のロシア映画や映画産業に関する文献の貸与を受け、内容を検討した結果、本研究推進のためにはロシア映画という視点も必要であると思い至った。留学時代の指導教員でもあったデルブレイユ先生は、感染予防のためにパリを離れておられたにも関わらず電話やメールだけではなく、何度もパリまで出向き、カフェのテラス席やリュクサンブール公園などで長時間に渡り指導して下さった。パリの街を歩きながらのベル・エポック期の文学者や芸術家の交流の様子についてのお話やご滞在先での画家、文学者ゆかりの地や歴史的建造物めぐりドライブなど、現地でないとは知ることのできない貴重な情報を提供して下さった。

コロナ禍での様々な制約はあったが、上述のとおり、このような特殊な時期であったために得た恩恵も多かった。何より研究者仲間との交流と新しい出会いについては何ものにも代えがたい良き経験となっている。研究協力に関して上に名前をあげた方々には、研究を離れたプライベートの部分でも大変お世話になった。どの方も「パリの状況にがっかりしていないか？」と問いかけ、少しでも私の研究滞在を快適で有意義なものにしようと努めてくださっていることがひしひしと伝わった。それによってコロナ禍での研究を停滞させることなく継続し、本研究に対する新しい方向性も見いだすこと

ができた。今後もこれらの研究者と協力しながら、最終的な目標である20世紀初頭におけるフランスの文学・芸術思潮や文化事象とその影響に関する実証的で総合的な研究を進めたい。

最後に、世界的パンデミックの際に、パリでの在外研究を認めていただいた同志社大学の関係者各位に感謝申し上げます。